

【特別寄稿】

ヒロシマへ行こう！

本間たけし

対人援助学会員ならびに対人援助学マガジン読者の皆さん。私は昨年「第14回大会」の実行委員長、本間たけしです。

第14回大会のテーマが「新潟水俣病とわたくしたち」に決まってから、特に熊本の関係者から、「本間さん、水俣病ば研究するとなして水俣にいかんとか」とお叱りを受けていました。そういえば大学生時代、いつも一緒に時間を過ごしていたH先生が水俣出身で、産科のクリニックをお父さんから継承したはずだと気づき、ネットで検索したらその所在が分かりました。H先生に「対人援助学ばなして研究しちつと？」と聞かれても、卒後40年間の経緯をすべて電話では話しきれません。時候の挨拶から始め、私が主宰する退院支援研究会や第14回大会開催の経緯の紹介を「Hレディースクリニック」出産希望者用メールに入力しました。ですが不審者だと思われるようで返信は有りませんでした。

思い切って、電話でH先生に第26回定期研究会の案内をしたのが、熊本弁で言う「7月頃やった」と思います。約1年後、現地で皆さんとお目にかかり、H先生はじめ熊本や鹿児島産科医やそのご家族が、如何に大変な日々を過ごしているかよく分かりました。

私と家内が水俣病にゆかりのある場所を訪れたいとお伝えしたところ、H先生夫妻は（私のマガジン49～51号の記事も熟読

されていたようです）熊本の同級生たちに声をかけ、40年ぶりに再会を祝う宴を準備して下さいました。会場に向かう「市電」が、かなり飛ばすので驚きました。冬でも路面は凍結しないそうなので、これで宜しいかとは思いますが。



写真の中に「指名手配者」はいませんし、皆さんがいわゆる公人なのでご紹介します。私の右側にいるのが「H先生」こと本田先生（産婦人科）、その後ろが間部院長（産婦人科）、私と家内の後ろが犬童（いんどう）院長と奥様めぐみ先生です。

家内は、私と付き合いを始めた頃、私が学生時代は同級生たちに嫌われていて、友人が一人もいないと話したところ驚いたそうですが、私こそ66歳になり、こんなに沢山友人がいたことに驚いた次第です。

翌日の昼は鹿児島島の南端から、市内の全出産を一人で請け負う中村院長が、醸造元でも入手困難な銘酒を持参して駆けつけてくれました。病院所在地の首長さんが、よき理解者と聞き、安堵しました。寡黙で誠実、真の九州男児じゃ。



ところで7月15日(土)に「訪熊(ほうゆう)」した私たちは、翌16日の早朝、熊本駅隣接のホテルから九州新幹線で新水俣駅に向かいました。『苦界浄土』の著者石牟礼道子さんによれば、昭和30~40年代は各駅停車で水俣駅から熊本まで、片道3時間近く要したそうです。私は当時、新潟から水俣を目指した齋藤医師や坂東弁護士は、どれくらい時間をかけていたのだろうかと改めて考えました。齋藤恒医師はいつも、月曜朝の外来が気になっていたようですが。

まず我々は、旧チッソ(現在はJNC)に向かいました。日曜にもかかわらず、守衛さんがにこやかに頑丈そうな門を開けてくれました。玄関で出迎えてくれたJNCのNさんが、さっそく社屋内でチッソの歴史や現況の説明を始めてくれました。



Nさんがここまでフレンドリーなのは、私の新潟土産が功を奏したわけではありません。長年、本田先生がNさんのご家族の健康を管理されているからなのです。

次に向かったのは、今話題の「百間排水口」です。老朽化を理由に廃棄処分に着手するという話がありましたが、患者個人や団体の要望で、工事は「見合わせ」になりました。水俣病の被害者だけでなく、人類にとって広島「原爆ドーム」のような意味がある施設だと私は思います。



それから、初期に多くの水俣病患者さんが報告された茂道・湯堂地区で、美しい海に放置されている漁船や、



沖合はるか彼方には、帆に風を孕み底引き網をひく「うたせ船」が見えるではありませんか。本田先生が「よかタイミングですね」と驚かれるほどの美しい光景でした。



私と家内が、最も心を動かされたのは、

山間の車1台が漸く向きを変えられるスペースから、さらに険しい細い山道を上り詰めた場所にある「乙女塚」でした。



確証はありませんが、そこには沖縄の人々が魂を休める「がま」に似た（「がま」は本来、自然の洞窟や鍾乳洞からなりますが、先の大戦では石を積みあげたり、塹壕のように穴を掘ったりして急遽作られたものもあったとか）慰霊の地があり、シーサーがひっそりとみ霊を見守っていました。水俣地区には南西諸島出身の労働者が少なからずいたと言われています。



最後に、私たちは新潟水俣病の被害者から熊本の被害者に送られた「阿賀の地藏様」と会うことが出来ました。



お地藏様の傍らで、水俣病の被害者のみならず、世界中の人たちが極楽浄土に迎えられることを願うご僧侶に会えました。



「水俣に行かずして、水俣病を語るなかれ」は真実でした。本田先生ご夫妻はじめ、私の同級生やJNCのNさん、そしてこのご僧侶のお導きで私はそのことを改めて確信しました。

1947年にG.バタイユが強調した¹⁾、原爆を投下された側の被害者たちが動物のように扱われた悲惨さと、投下した人間と競い合い原爆を作り出した文明の愚かさ²⁾は、最近のハリウッド映画の浅はかな宣伝でよみがえりました。でも「復讐するは我にあり」は、人ではなく神の言葉です。

皆さん、2023年11月11・12日に広島で再会の喜びを分かち合い、学びあおうではありませんか。岡崎さん、迫さん、来須さんと広島の間仲間たちが待っています。

行きましょう、広島へ。

2023年夏 本間たけし

推奨文献

1. G.バタイユ著.酒井健訳：「ヒロシマの人々の物語」.景文館書店.2020.
2. 石川学著：「理性という狂気 G.バタイユから現代世界の倫理へ」.慶應義塾大学出版会.2020.